ガンディーの禁欲(1)

彼にとってのブラフマチャリアの必要性*

近藤光博

「マハトマ」の尊称で名高い Mohandas Karamchand Gandhi[1](1869-1948)をして世界にその名を知らしめているのは，徹底した非暴力による政治運動，＜サティアグラハ＞である。彼は，＜サティア＞すなわち「真理」と呼ぶものを，自分の生きる時空において実現せしめんと，生涯にわたって真摯な努力を重ねた。そうした努力のうち，彼にとって最も重要だったものの一つが，虐げられた者の具体的救済であり，また別のものが，＜アヒンサー＞すなわち「非暴力」であった。そこから彼の＜サティアグラハ＞は生まれている。

これに比すれば，ガンディーがきわめて厳格な禁欲主義者であったことは，広く知られているとは言えない。彼は，衣食住すべての生活領域にわたって，最も貧しく質素な生活をこそ最高のものとみなした。[2] 仕草や話しぶりも，非常に抑制された穏やかなものだったと伝えられている。彼の目指していたものは，あらゆる欲望と情動を意思のコントロール下においてしまうことであった。そして，こうした禁欲の諸実践もまた，彼にとっては＜サティア＞実現のために欠かすことのできない課題として認識されていたのである。

なかでも性欲は，制御されるべき最も深刻な課題とみなされた。幼児婚の風習によって 13 才で結婚していたガンディーは，37 才のとき，妻カストゥルバーイとの性交渉の断念に踏みきる。これが＜ブラフマチャリア＞の誓いである。[3]

その後の生涯，ガンディーは，この誓いを全うするため試行錯誤を重ね，比較的早い段階において，性欲の制御のためには全面的な禁欲の実践が必要だとの結論を得ている。すなわち，この誓いを境に，味覚と食欲の制御に始まって，彼のセルフ・コントロールの努力は次第に生活の隅々にまで及んでいくのである。こうした意味で，彼の＜ブラフマチャリア＞は，単に“性的禁欲”という伝統的な意味でばかりとらえられるべきではない。彼にとっての性欲の問題とは，彼の禁欲的ライフ・スタイル全体にとっての出発点・焦点としてのみ把握可能なものである。[4]

しかし，ガンディーの禁欲の全体像を論ずるのはこの小稿では足りない。本稿では，性的禁欲としての＜ブラフマチャリア＞に限定して議論を進めたいと思う。そして特に，彼がそこにかけた情熱，あるいは動機・目的を論じてみたいと思う。[5]

1. 本 論

性的禁欲としてのガンディーのブラフマチャリアは徹底したものだった。

たとえば彼は，ブラフマチャリアの最終目標は「行為と言葉と思考(deed, word and thought)」すなわち「身口意」全ての領域における完全なる遵守である，としばしば語る。[6] この誓いから 20 年を経た 50 代後半の彼が著した自伝には，次のような言葉も見られる。ブラフマチャリアは「肉体の節制から始まる。しかしそこで終わるものではない。その完成は，不純な思い(thought)さえ

排除している。真にブラフマチャリアを体得した者は，肉体の欲望の充足を夢見ることすらしなくなる。そして，彼がその境地になるまでには，なすべきことがたくさんあるのである」。「私にとっては，肉体のブラフマチャリアを守ることでさえも，困難に満ちたことであった。今日では，私自身かなり危なげなくなったと言える。しかし私は，それこそ本質的なことである思い(thought)に対する完全な支配をまだ達成していない。そうしたいという意思や努力が欠けているのではない。私の問題は，好ましくない考えがどこからか湧いてきて，ずる賢く侵入してくることなのである」。[7]

こうした言葉を読むとき，私に生ずる疑問はこうである。“性欲についてここまで禁欲的たらんと欲した人間の意識とは一体どういうものだったのか？　ガンディーをしてここまで禁欲的な方向に駆り立てたものは何だったのか？　彼は何を目指し，何を得られる見込みをもって，我々には不可思議で容易ではなく感ぜられるブラフマチャリアの誓いへと至ったのだろう？”この問いを少しでもときほぐすことが，本稿の主題となる。

他方，本稿の主たる資料となるのは，50代後半のガンディーによって著された『一つの自伝あるいは私の真理探究の物語』[8]である。本書において彼は，ブラフマチャリアに至る精神遍歴について，いくらか詳しく回想している。本節(2)で論ずるように，その直接の契機としては，南アフリカにおける三つの出来事を指摘することができる。

しかしその中で語られる事柄の多くは，それに先立つ結婚生活の記憶と深い関わりをもっている。我々は“独特な”と形容し得るこの記憶から議論を始めるのがよいだろう。

(1)　結婚生活の記憶[9]

『自伝』の記述から読みとる限り，ガンディーは，単に生真面目と言うよりは，正しい(truthful)と思われることを自分が体現できていないことに対し鋭い拒否反応を示すタイプの少年・青年であった。

たとえば性の問題については，一夫一妻制にかぎった男女交渉のみ，しかも情欲に押し流されず十分にコントロールされたものとしての夫婦関係のみが，ガンディーにとってのあるべき男女関係であった。そのようなものとして性の問題には既に十分な答えが与えられており，あとはその＜真理＞に沿うよう自分をどのように御していくかが，彼にとっての唯一の課題となるはずであった。

ところが彼の人生は，ガンディーをして，そうした“自明の”課題に向けた一直線の道を歩ませはしなかった。少年期・青年期におけるガンディーの妻カストゥルバにまつわる記憶は，一言で言って，幼児婚という風変わりな慣習に始まる“傷つき屈折した性の体験”であった。

二人の結婚式は，古式に則った盛大なものだったという。もっとも何も聞かされていなかった彼にとっては，華やかな儀式が行われる中「見なれぬ女の子が遊び相手になってくれた」という程度の出来事だったようである。1882年，幼い夫婦はともに13才であった。

しかしそれは，ガンディーにとってもカストゥルバにとっても，容易ではない生活の始まりを意味していた。彼の穏やかならぬ記憶は，初夜の営みからすでに始まっており，さらにそれに続く嫉妬と所有欲に翻弄される若き自己像へとつながっていく。幼児婚の習慣にしたがって親同士が取り決めたパートナーではあったが，彼は，妻に対して貞節であることこそ夫の義務であり，＜真理＞にかなうことだと考えた。

しかし，貞節であれとの教訓はまた，困ったことにもなった。「もし私が妻への貞節を誓うべきであるなら，彼女もまた私への貞節を誓うべきである」と私は心に思った。この考えから，私は嫉妬深い夫になった。(10)

義務/真理とみなされるものに対するこうした一本気な調子は，じつに熱烈なものだったようで，後年の「マハトマ」を彷彿とさせる。もちろん我々は，こうした妻への態度を，単に義務/真理に対する情熱としてのみ解釈する必要はないし，ガンディー自身もここでそのようなことを述べようとはしていない。そうした情熱はまだまだ荒削りなもので，若く幼い男としての情欲や支配欲と不可分に混じりあっていたものと見受けられる。

嫉妬心と所有欲に駆られた少年ガンディーは，夫の権威をふりかざし始める。四六時中妻を監視し，彼女の行動にいちいち干渉した。気丈で強情っぱりな少女であったらしいカストゥルバは，そうした夫の拘束に我慢がならず，自由に行動することを主張した。そんなとき幼い夫は，ますます意地悪く妻を拘束しようとしたため，お互いに口をきかないのが日課のようになっていた，という。ガンディーは，こうした状況を悔いをもって想い起こし，「実際のところそれは監禁であった」と表現している。(11)

当時のインド女性のほとんどがそうであったように，無学であったカストゥルバに対し，学生ガンディーは，彼女の教師たることを自認し，しつこく教育を与えようとした。しかしその試みはほとんど失敗に終わり，彼女は生涯，読み書きがほんの少しできる程度だった。それは，彼女自身がそもそも教育に無関心で，夫の押しつけがましい努力に抵抗し続けたためであったのだろう。が，もう一つの大きな理由として『自伝』において想起されるのは，ガンディーの側の情欲である。カストゥルバを「理想の妻に仕立てあげたい」と考え，「彼女に清らかな生活を送らせ，私が学んだことを彼女にも学ばせ，彼女の生活と考えを私の考えと生活に一致させること」を願っていたにもかかわらず，ガンディーは次第に性の虜になっていた，という。学校にいるときには，「夜の帳が降りて，やがて彼女と二人きりになれるという思い」が彼の心につきまとった。(12) 学生であるうちは欲望を制御するのは当然であったのに自分はそうしなかった，と彼は『自伝』の中で恥じている。(13)

もしこの貪るような情念と平行して，私のうちに義務に対する燃える情熱がなかったら，私は病魔の餌食になって若死にするか，世間の厄介者になりはてていたことだろう。(14)

やがてある事件が起こる。肉欲の虜になって我を失っていた記憶は，この事件によってガンディーの心に癒しがたい傷となって残ることになる。

そのころ彼の父は病床にあった。幼いころから孝行者シュラヴァナの物語を「見習うべき手本」としていたガンディー(15)は，父の看護を自分にとっての最大の責務とみなしていた。彼は，夜になればいつも父の足をさすり，父が退がってよいと言うか，あるいは寝入ってからやっと傍から離れるようにしていた。この仕事に大きな喜びを感じていた彼は，寝食以外の時間を学校へ行くことと父への奉仕にふり分け，記憶するかぎり一度もそれを怠らなかった，という。しかし，『自

伝』を著すガンディーには，この誇らしい奉仕の思い出とともに苦々しく思い起こすことがあった。それは，父の足をさすりながらも「心は寝室のあたりをうろついていた」ことであり，「いつもその義務から解放されると，嬉々として，父へのあいさつをすませるや寝室へと飛んでいった」ことである。

そして「恐ろしい夜」が訪れる。ガンディーが16才のときのこと，彼はいつものように父の足をさすっていた。夜の十時半か十一時ごろ，たまたまやって来ていた叔父が交代を申し出てくれたので，彼は喜んでまっすぐ寝室に向かい，眠っていた妻を揺り起こした。5，6分して召使いが扉をたたき，父の臨終を知らせた。彼は後悔の念でいっぱいになり，深く悲しみ，深く恥じいった。彼は父の部屋に走って行き，「もし情欲に目がくらんでいなかったら，父の臨終に立ち会えただろうこと」を悟った。

> この章で私が述べた恥とは，奉仕をしている最中にも私を悩ませつづけた肉欲に対する恥である。それは今日なお，私には消し去ることも忘れることもできない汚点である。両親に対する私の深い信頼の情は限りないものであり，そのためには一切を投げうつこともできた。だがそれにも関わらず，奉仕のときにも私の心は肉欲を捨てることができなかったのだから，この奉仕にはなお赦しがたい不十分さがあったのだと，私は常々考えている。私は，自分が一夫一妻制に忠実な夫だったとは思っているが，また肉欲的な夫であったとも考えている。私が情欲のしがらみから解き放たれるには，非常に長い時間を要したし，またそれを克服するまでには，なおいくつかの苦難を経なければならなかった。(16)

この事件にはさらに苦い記憶がつけ加えられる。父の死のとき，カストゥルバーイが身ごもっていたこと，そして，そのときの子供(恐らくは最初の子供)が生後数日で死んでしまったことが，彼の罪悪感をことさら大きなものにした。そのことがガンディーは「起こるべき結果が起こった」と回想し，この実例を戒めとすることを『自伝』の読者に勧め，父の死の夜について語る章を結んでいる。(17)

(2) 南アフリカの記憶

ここで少々時間はとぶ。その後ガンディーは，ロンドンへ留学し弁護士資格を取得する(1888-1891)。(18) インドに戻って弁護士業を生業としようとするが上手くいかず，南アフリカにわたることで心機一転を試みる(1893)。(19) このことが彼の人生を大きく変えた。彼は，南アフリカでの人種差別政策の現実と激しく衝突し，やがてこの地のインド人コミュニティのための人権闘争を組織するリーダーとなっていく(-1914)。(20)

この時期を回想するために，『南アフリカにおけるサティヤグラハ』(21)の全体と『自伝』の多くの部分とが割かれている。非暴力・不服従という彼独自の民衆運動のスタイルが築かれ，それに＜サティアグラハ＞の名称が与えられたのも，この時期・この土地でのことであった。

そして本稿にとって何より重要なことは，彼がブラフマチャリアの誓いを立てたのも南アフリカにおいてであったという点である。

『自伝』では，この誓いに至るまでの精神遍歴がいくらか詳しく回想されている。我々は，次の三つの出来事に焦点を当て，それを追っていくことにしよう。

a. ある激しい夫婦喧嘩

1898年，ガンディー29才の時のこととして，ある激しい夫婦喧嘩が記録されている。この夫婦に衝突はつきものだったが，殊にこのときの喧嘩は印象的だったようで，『自伝』の一章まるまるがこの出来事の回想にあてられている。

喧嘩の原因は，同宿の不可触民出身者の排泄物の処理のことだった。彼の当時の家には下水設備がなく，各人は部屋に置かれた壷に大小便をするようになっていた。そして，いかにもガンディーらしいことであるが，その壷の処理を自分と妻の仕事としていたのである。カストゥルバは，他の者の壷はどうにかしたが，不可触民であったこのクリスチャンのものだけはどうしても洗うことができなかったし，夫にもそれをしてほしくなかった。ガンディーは，妻のこうした態度に我慢がならなかった。幼い頃から消えることのない「義務に対する情熱」から，妻には正しい(truthful)人間であって欲しいと切に願っていたからである。

しかし，見慣れたはずの妻の涙が，確信と誇りをもって妻を厳しく教育しようとしてきたガンディーに，このときばかりは恥の感覚を与えた。喧嘩の末，妻を玄関から蹴り出した彼[22]は，ヒンドゥの夫のイメージをなぞりながら自分がこれまで妻に対していかに横暴であったかを，フと自覚したという。妻を正しい人間に仕立て上げようというかつての情熱は，今や「盲目の愛情」と喝破される。[23]

あるとき人は自分のしていることをフと自覚することがある。これまで見えていなかった“本当の姿”が見えるようになった，と感ずることがある。ガンディーもこのとき，そのような体験をしたのかもしれない。彼は，いわゆる“精神的成長”を遂げ，自分の生についての既存の了解をはなれるための足場をいくらか固めたのかもしれない。

他方，この章に含まれる別の小さな言葉にも注目してみよう。すなわち，当時まだ「妻というものは夫の欲望の対象で，夫の命にしたがうべき存在であると考えていた」との言葉である。[24]後半の句は夫の権威の確かさに何の疑問も抱いていない若きガンディーの姿を表すものであろうが，その前に置かれた「欲望の対象で」という句は，我々『自伝』の読者に結婚生活を回想する一連のあの言葉を想起させる。『自伝』を著す彼は，もう30年も前の夫婦喧嘩について語りながら，このとき確かに，義務・真理に反するもの/暴力/不道徳としての性生活の記憶へと思いを馳せている。

結婚以来の精神遍歴の汚点に他ならなかった性生活の記憶と，夫の専制的位置づけとが同時にイメージされるというのは，ガンディーに典型的な思考である。ここでも(それが，この喧嘩の当事者であった若きガンディーその人であったのか，すでに一度全インド的な反英運動を指導した熟年期の彼であったのか，この箇所の記述からだけでははっきりとしないが，ともあれ)＜男としての情欲＞と＜夫としての横暴＞というテーマが混じりあいながら大きく浮上する。そしてそれは，夫婦関係についての深い内省の始まりであり，彼をしてブラフマチャリアに向けて内的な準備を整えさせた事件であった，と見なすことができるだろう。

b. ラーイチャンドとの会話

次に登場するのは，ラーイチャンドという名の，ガンディーより数歳年上の敬虔なジャイナ教徒である。ガンディーはロンドンより帰国直後に彼との知己を得，それ以来この人物の＜真理＞＜神＞＜自己実現＞に対する情熱にきわめて大きな影響を受けている。[25] 事はブラフマチャリアについても同じだった。

> …しかし私が…ブラフマチャリアを遵守するのは重要なことだと悟ったのは，南アフリカにおいてであった。そうした方向に私の思考を向けたのが，どのような環境，どのような本であったのか，はっきりと言うことはできないが，私が想起するに，大きな要因だったのはラーイチャンダバーイの影響である。[26]

(それがいつのことであるか『自伝』の記述からは特定できないが，ともあれ)ある日，ラーイチャンドはガンディーと会話をしていた。あるイギリス人夫婦の逸話へと話題は移った。それがガンディーの人生に大きな転換点を与えることになる。

ここでこの会話の詳細をいちいち考察していくことはできないが，私の読み取りでは要するに，ラーイチャンドはこのときガンディーに向かって，＜夫婦の間にかぎられた愛よりも，より普遍的な広がりをもった愛の方が＞，＜当然とされる愛よりも，より実現が困難である愛の方が＞ずっと価値が高いということを説いたようである。

ガンディーはもちろんこういった理念をよく知っていた。まさにそうした方向に人生の全てを振り向けるべく，彼の奮闘は，「改革」という名を与えられた一連の努力，あるいは南アフリカにおけるインド人のための人権闘争という形ですでに始まっていた。彼が強い衝撃を受けたのは，おそらく，そうした理想と反するものとして妻に対する執着心が依然として彼の中に存在し続けており，しかも十分な自覚をもってそれに対決しようとしていなかったことの自覚だったのだろう。

このとき受けた衝撃は，次第にガンディーの中で大きなものとなっていき，次のような自問の言葉を生んだ。

> …それでは私と妻との関係はどうあるべきなのか？　私の誠実さは，妻を欲望の道具とすることに存していたのか？　私が欲望の虜であるかぎり，私の信仰の篤さも何の価値もない。公平に言って，彼女は決して誘惑する女ではなかった。したがって，もし私がその決意をしさえすれば，ブラフマチャリアの誓いを立てることは最も簡単なことだった。障害になっていたのは，私の弱い意志，あるいは欲望に染まった愛着の想いだけだった。[27]

ここでもガンディーは，女性としての妻に対する情欲，そして暴力/不道徳としてのセックスの記憶を呼び覚ます。妻に対する確かな愛も，いまや彼には情欲まみれの偏愛に見えている。それはいよいよ固まりつつあった，万民を等しく愛したいという熱望と対立する性向に他ならなかっ

た。[26]

そして1900年(別の箇所では1901年)，性的禁欲を目指すガンディーの努力はいよいよ具体的な形をとるようになった。妻と寝起きを別にすること，肉体労働でへとへとになるまで床につかないこと等々，夫婦生活を断念すべく彼はいくつもの努力を重ねる。が，まだ彼の中には迷いがあり，動機も十分に強いものとはなっていなかった。ブラフマチャリアの誓いに至るまでの6年間で2度失敗があった，との告白がなされている。[29]

c. ズールー族の「反乱」

最終的決意は，1906年，ガンディー37才の時のことである。

このとき南アフリカでは，「ズールー族の反乱」と言い慣わされる戦争が起こっていた。[30] そしてガンディーは家族を残して，インド人野戦病院隊をひきいてこれに従軍していた。

悲惨な「人間狩り」の光景を見，運ばれてくるズールーの負傷者を手当しながら，ガンディーは沈鬱な気分に陥ったという。そしていよいよ，自分の生涯を完全に公の奉仕のために捧げようという決意を固め，そのためには家族を犠牲に付せざるを得ないとの結論に至るのである。これについては，私が多くを語るよりも，明確な言葉でこれを回想する『自伝』の言葉に十分なスペースを与え，これに語らしめるのがよいだろう。

…兵役を申し出た1ケ月間，非常に注意深く築き上げてきた家庭を手放さなければならなかった。私は，妻と子どもをフェニックスに連れていき，インド人野戦病院隊をナタール軍に所属させた。そのときなさなければならなかった困難な進軍の中で，私にある考えがひらめいた。もし社会に対してこのようにして自らを捧げたいと願うなら，私は子どもと富に対する欲望を放棄し，ヴァナプラスタ，すなわち，家庭の関心事から隠遁した者の生活を送らねばならない，と。[31]

…そのときの私は，それ［ブラフマチャリア］が自己実現にとってどれほど不可欠なものであるか知らなかった。しかし，全霊をもって人類に奉仕することを熱望するものは，それなしにはやっていけない，そのことははっきりとわかっていた。私がいま尽くしているような種類の奉仕の機会は，今後いよいよ多くなっていくだろう。それに，もし家庭生活の楽しみや，子どもを生んだり，育てたりすることに熱中すれば，私という人間がその任務に耐え得ない者になってしまうだろう。私はそのことを確信したのである。

一言で言えば，私には二頭の馬に同時に乗ることはできなかったのである。たとえば，今回のような場合に妻が出産間近であったならば，私はこの奉仕の中に身を投じることはできなかったはずである。ブラフマチャリアを遵守しないことによって家族が拡大してしまえば，それは社会の向上という仕事にとって障害となるであろう。もし結婚していてもブラフマチャリアを遵守するならば，家族への奉仕が公共の奉仕の行く道をさえぎることはないだろう。[32]

戦争体験は公への奉仕に対するガンディーの情熱を極度に高めたことだろう。ブラフマチャリアの誓いという全く強固な形式を，彼はぜひとも必要と感じた。[33]

(3) その後のブラフマチャリア

1906年以降を回想する『自伝』の記述や，残されたその他の彼の言葉には，ブラフマチャリアに対する迷いの言葉はもう全く見られない。我々の知りうるかぎり，厳格なる性的禁欲というライフ・スタイルについての彼の確信は，一度確立された後は，強まりこそすれ弱まることはなかった。

最終的にそれは，彼が＜真理＞＜神＞などと呼ぶものを実現するための不可欠の手段として，彼の思想の中で揺るがすことのできない位置を占めるようになる。すなわち，晩年のガンディー思想のもっとも核心的な部分に位置するものとして，＜自己制御/自己浄化としてのブラフマチャリアの実践なくしては，真理ないしは神を実現することはできない＞という信念が確立するのである。[34]「ブラフマチャリアの完全なる遵守はブラフマン＜真理＝神＞の実現を意味する」「“チャリア”は“行為”を意味し，ブラフマチャリアとは，“ブラフマ”すなわち“真理”探求のためにとる行為ということになります」「ブラフマチャリアとは何か？　それは，私たちをブラフマ＜神＝真理＞へと導く生き方のことです」。

> 真理と結婚して真理だけを崇拝する人が，もしその能力を他のことに割くならば，それは妻である真理に不貞をはたらくことになります。それでは，どうして自分の感覚を満足させればよいのでしょうか？　真理を実現することに全精力を完全に捧げている(真理の実現には絶対的な無私が必要です)人には，子どもをもうけるとか，家庭生活を営むといった利己的な目的にあてる時間の余裕はありません。利己心を満足させながら真理を実現するというのは，言葉の矛盾です。[35]

ガンディーにとって，妻や子どもに対し大幅に関心を向けざるを得ない家庭生活は，あくまでも個人的次元の問題であって，その意味ではきわめて利己的な性質のものだと感ぜられている。それは「無私の精神」と相いれないものであり，したがって，絶対的な無私の精神にのっとった行為を通じてのみ実現されるであろう＜真理＝神＞にとっての障害となる，と考えられているのである。[36]

2. 結　論

(1) ブラフマチャリアの必要性

ガンディーにとってのブラフマチャリアの必要性は，複合的なテーマの重なりであった。

まず第一に，妻に対する横暴と情欲とのコンプレックスを指摘できる。ガンディーにとってそれは，＜真理＝義務＝神＞に反するもの/暴力であり，掛け値なしにすぐにでも克服されるべき悪徳以外のなにものでもなかった。きわめて鋭敏な良心の持ち主であった彼には，妻帯以降そうし

た否定的世界に拘泥し続ける自分の姿が，おそろしい悪夢のようにまとわりついて離れなかった。

第二に，<家族>がもつ特殊関係性とガンディーの理想との軋轢が挙げられるだろう。彼は，夫そして父としての義務・家庭生活の楽しみなどを，公への奉仕を全うするためには障害になってしまうものであり，そのためには犠牲に付せざるを得ないものとみなして疑わなかった。さらに，より内的な次元においては，家族に対する想いの中に，ひとたび情欲や支配欲や所有欲の影が見いだされるや，それは普遍的な愛の実現を不可能にする執着心・偏愛そのものとして立ち現れた。こうして(『自伝』の記述は，“断腸の思いで”ではなく，むしろ喜びをもって彼がそうしたという印象を与えるが，ともあれ)彼は実際，「家族」という特殊な人間関係のあり方を万民の奉仕の前の犠牲として捨て去ったのである。そしてそれら一連の理想は，<真理＝神>実現という究極的目標の下に統一的に配備されることになる。

これらの課題がブラフマチャリアの誓いという形で整理されるまで，最も自覚的な作業としては6年，長くは20年の逡巡と試行錯誤があった。それは，人が真剣に(彼の場合，言葉の厳密な意味で「真剣に」)一つの課題に取り組みつづけるのには十分な時間であろう。そしてさらに，我々が次のように想像してみたとしてもあながち的外れではあるまい。すなわち，『自伝』に記録されたこれらの物語よりも，実際のガンディーは，もっと複雑でアンビヴァレントな精神過程を経たはずだ，と。

(2) ブラフマチャリアと“伝統的”思考

禁欲家ガンディーは，性にまつわる種々の伝統的思考の後押しなくして出来上がることはなかっただろう。[37]

(その具体的な局面については，様々な角度から切り出しが可能であるが，本論から指摘できる範囲では)第一に，ガンディーは，その禁欲的ライフ・スタイルを形作るのに，伝統的イメジャリーを積極的に用いる。たとえば何よりも「ブラフマチャリア」という観念からして，きわめて古い南アジア的思考の一つである。[38] また，ブラフマチャリアの誓いを立てる決意を表明した，上の引用文中に「ヴァナプラスタ」という語があった。これは「四住期」と呼ばれる古いライフ・ステージの観念の中に見られる語である。この人生論は，完全な出家者の生活(第四期)の前段階として，ハウス・ホルダーとしての第二期の次に，出家遊行者のごとくでありながら世俗の事柄にもいくらか関わるという中道的性格をもった時期を設定する。これがヴァナプラスタであり，ガンディーは，いよいよ例の“世捨て人風の社会運動家”という独特のスタイルを形作らんとするとき，自己規定としてのライフ・イメージを採択したのである。この他にも，禁欲のエートスが公への奉仕や非暴力等と渾然となって，<真理＝義務＝神>実現という究極的目標のための不可欠の手段として規定される点なども，ある種の伝統的思考との接続を指摘できるだろう。

もちろんガンディーの場合，用いる語がどのようなものであるにせよ，内容における近代的性格も同時に指摘されねばならない。イギリス近代の信奉者であった彼が，ロンドンで南アジアの文化を再発見し[39]，次第次第にそれを自身の信条として主張するようになったことは，強調されるべきである。しかし，性のタブーを引き下げ切り崩そうという試みにも「近代」という語が冠せられるとしたら，それはガンディーとは無縁/敵対する近代性であった。性の問題に関するかぎ

り，彼は，ある種の伝統的理解，ないしはそれを護持しようとする保守的見解を決して踏み出そうとはしない。

すなわち，一夫一婦制のもつ“道徳性”に対する揺るぎない確信，複数の相手との性交渉の罪悪視，あるいは，たとえ相手が妻であっても性欲の指向性を満足させることそのものの罪悪視，低い段階に位置するものとしての動物性と性行為とが同質であるとの認識，男性から女性に加えられる一方的暴力としてのセックス観，そしてこれらの観念を至上なる“義務”“神の命令”として確信すること等々。ガンディーの性意識は，性にまつわる“保守的”見解の代表的な要素によって，ほとんど全く占められている。[40] 彼の時代，ヨーロッパにおいても(ヴィクトリア的道徳主義やトルストイ主義を想起せよ)南アジアにおいても，そうした思考にはまだまだ勢いがあった。その中にあってガンディーは，この種の倫理を“疑うことなく”自分のものとしていた。これが第二の論点である。

本稿の主題は＜ガンディーにとってのブラフマチャリアの必要性＞である。この問いに対し，とりあえず前節では「様々なテーマの重なり」という表現で答えた。しかし，もしも＜最も重要で本質的だった要素は何か？＞と問いなおされるのなら，ガンディーの中に深く，そして“きわめて素直に”浸透していた，性の問題に関するこの“保守的”思考を挙げよう。

こうした“保守的”思考を“迷いなく”会得することなくしては，ブラフマチャリアへと方向づけられた慣性が成立しなかったろうし，数十年におよぶ行程を歩みきるエネルギーも与えられなかっただろう。本論で論じたように，我々は，結婚生活の最初期に記憶をブラフマチャリアの出発点と考えることができる。そこでガンディーは，支配欲や所有欲と混じり合った荒々しい性欲に支配され，それに“もだえ苦しむ”若き自分の姿を描き出していた。この“苦しみ”は，1906年まで彼にまとわりついて離れることはなかった。シニカルな論者なら，＜公への奉仕の完全なる遂行のために家族を犠牲に付そうという彼の決意も，実は，性の“苦しみ”から自分を解放するための良い口実にすぎなかった＞とすら言うかもしれない。ガンディーの“苦しみ”の激しさは，明らかに，＜性欲は厳しく制御されるべし＞という命令文を，真面目に(彼の場合，言葉の真の意味で「真面目に」)＜真理＞＜義務＞ないしは＜神＞の言葉として受けとめていたことに根ざしている。それが実に“素直に迷いなく”持続され得たことこそ，彼のブラフマチャリアの最大の秘密のひとつであった，と私は考える。[41]

(さてそれにしても，ガンディーが拠って立つところのものを「伝統的」ないしは「保守的」思考と呼んだところで，一体それは十分に理解されたのだろうか？　そして，我々がもし彼の思考・実践に驚きと違和感を感じるとしたら，我々の拠って立つところのものとは，一体何なのだろうか？)

注

(1)　以下単に「ガンディー」と呼ぶ。

(2)　たとえばガンディーは，ロンドン時代から南アフリカ時代の前期を通じて，英国製のスーツを身につけていたが，やがてこれをインド亜大陸民衆の着衣へと変えていく。それは，手織りの綿布(カーディー)を体に巻き付けただけのもので，最貧の人々にも入手可能あるいは製造可能な布である。(カーディーはまた，いわゆるガンディー主義における“象徴”として示されても

いたのだが，ここで詳述する余地はない)。ブラフマチャリア完遂のために最も肝要なものとみなされた嗜欲の制御について，彼の食事は，菜食主義につらぬかれ，一切の嗜好品を摂らなかったのはもちろん，油や香辛料も用いず，果物やナッツ類を未調理のまま限られた量だけ摂るというものだった。さらに，彼が最晩年を過ごした家屋(ワルダーのアーシュラムに現存)は，草木と泥で造られた実に質素なものである。そこに備えられたベッドや本棚までもが泥造りで，最も貧しい人々と同じ生活を送ろうとしていた彼の試みがよく看て取れる。

(3) この語は古いサンスクリットで，漢語の直訳では「梵行」，意訳では「不婬」等と表される。ブラフマチャリアは，仏教・ジャイナ教において広く，いわゆる出家者のための五戒の一つに数えられており，また数々のヒンドゥ文献においても，行者のための五戒に加えられている。

(4) 実際，ガンディー自身しばしば，そうした伝統的なブラフマチャリア観念の「不完全さ」について語っている。例えば，"Letter to Narandas Gandhi," 1930. 8.3/5 : reprinted in The Collected Works of Mahatma gandhi (hereafter CWMG), vol. 44, p. 70 を参照。この手紙は後に，小冊子 From Yeraveda Mandir に，Chap. 3 "Brahmacharya or Chastity"として収められた。他にも，後述する『自伝』の中の，味覚・食欲の制限および断食がブラフマチャリアの遵守にとって不可欠である，との言葉(CWMG, vol. 39, p. 265)など，多く見られる。

(5) 紙幅の都合という理由と並んで，このようにする意図は，Erik H. Erikson の著書 Gandfi's Truth : On the Origins of Militant Nonviolence (W.W. Norton & Company, Inc., 1969) を稿を改めて取り上げたいというところにある。本稿では，そのための前提となる事柄を取り上げる。エリクソンによるブラフマチャリア批判は，それを性的禁欲としてとらえられる向きが強すぎる点と，基本的な事実誤認とにおいて，補足と修正を要するものと私は考えている。なお，本書の邦訳には，E.H.エリクソン『ガンディーの真理――戦闘的非暴力の起源』(星野美賀子，全二巻，みすず書房，1973 年)がある。

(6) ex.上掲註 [4] "Letter to Narandas Gandhi", p. 69.

(7) CWMG, vol. 39, p. 253-254.ガンディーの自伝は，次の二部に分けて執筆・出版された。M.K. Gandhi, An Autobiography or The Story of My Experiments with Truth, reprinoed in CWMG, vol. 39, pp. 1-402 ; and Satyagraha in South Africa, reprinted in CWMG, vol. 29, pp. 1-269.ここで引用した言葉は，前者の部に含まれる。

(8) 上掲註 [7] 参照。以下『自伝』と略記する。

(9) 煩わしさを避けていちいち注記しなかったが，本節の論考は，次の研究に多くを負っている。上掲註 [5]，E.H. Erikson, Gandhi's Truth。および，森本達郎『人類の知的遺産 64 ガンディー』(講談社，1981 年)，とくに 45-56 頁。
本節は，ガンディーなる個人の少年期を一つの軸に沿って切り出そうという試みである。その際，我々の持ちうる視点・資料は原理的にきわめて多様である。しかし，本節で私は，ある種の方法を採択した。すなわち，以下で論じるような，ガンディーの禁欲にまつわる事件の選択と，『自伝』を主たる資料とするいき方とである。これらの点において私は，エリクソンの仕事と，おそらくはそれをしばしば参照したと思われる森本の仕事とに多くを負っている。

(10) CWMG, vol. 39, p. 14.

(11) CWMG, vol. 39, p. 14.

(12) CWMG, vol. 39, p. 15.

(13) CWMG, vol. 39, p. 28.ここで「まだ学生であるうちに」とあるのは，ヒンドゥの一伝統である「四住期」の観念(後述)を想起させる。このライフ・イメージにおける学生期は，師への随順と禁欲生活を旨としながら聖典学習に努めるべき期間とされる。ちなみに，この学生期もサンスクリットで「ブラフマチャリア」と言われる。

(14) CWMG, vol. 39, p. 15.

(15) CWMG, vol. 39, p. 10.

(16) CWMG, vol. 39, p. 30.なおここで言う「本章」とは,『自伝』, Part I, Chapter IX "My Father's Death and my Double Shame"のこと(CWMG, vol. 39, p. 28-30)。

(17) CWMG, vol. 39, p. 30.

(18) このときのロンドン行きの熱望はかなり激しいものだった。ガンディーは,臆病で人前で話すこともままならなかった少年だったが,反対するコミュニティの人々を説得すべく,ときには危険な旅も顧みずあちこちを奔走し,最終的にはジャーティ・コミュニティの反対を無視するという強い態度を示してこれを実現させた(CWMG, vol. 39, p. 34-40)。このときガンディーには,生まれてほんの数カ月の子どもが一人いた。しかし彼は妻子を残して単身でロンドンに留学する。しかも,その費用を捻出するために,妻の装身具まで売り払ったらしい(CWMG, vol. 39, p. 39)。妻子との別れの心情について『自伝』は何も語らないが,彼にとってこの留学がなにものにも代えがたい魅力をもっており,家族もそのブレーキとはならなかったことだけは確かである。

(19) 南アフリカに渡る際の妻に対する心情は,次のように語られている。「今回は,妻との別れに痛みを感ずるばかりであった。…私たちの愛は,情欲から自由になったとはまだ言えなかったけれど,次第に純粋なものになりつつあった。ヨーロッパから戻ってから,私たちはほとんど一緒に過ごさなかった。よろしくないものだったとは言え,いまや私は彼女の教師となって,ある種の改革をすべく彼女を手助けしていたので,ただ改革を続けるということだけでも,私たち二人はもっと一緒にいる必要を感じていた」(CWMG, vol. 39, p. 86)。なおここでの「改革(reform)」について,その内容は明示されないが,合理的で社会改革的な方向へとヒンドゥ社会(ないしはヒンドゥ教)を押し進めようという19世紀以来の動きを,この言葉で呼ぶことがある。『自伝』において「改革」という言葉は,ガンディーが自らの人生を探求する際のキー・ワードとなっている(例えば,ロンドンから帰国した際の心情について語るCWMG, vol. 39, p. 74などの箇所はそれを顕著に示している)。

(20) 20年におよぶ南アフリカ滞在期間中,ガンディーは2度インドに帰国している。一度目は,1896年半ばから1897年1月までで,インドに残っていた妻子はこのとき彼とともに南アフリカに渡った。妻子とともに住むと決まったことについて,『自伝』にはその時の心情を回顧する言葉はとくに記録されていない。2度目は,1901年(?)から1902年末までで,妻子とともにインドに戻っている。インドでの弁護士業は非常にうまくいき,家庭生活も順調であった。しかし南アフリカから要請され,南アフリカに戻ることになった。1年ほどで帰国できようとの見込みがあったので,彼は妻子をインドに残して単身で出発した。この時の心情は次のように記されている。「妻や子どもたちとの別れ,注意深く築いた住みかを壊してしまうこと,そして確かさから不確かさへと向かうこと,これら全てが束の間の苦痛だった。しかし,私は自らを不確かさに慣らすことにした。この世で確かなものを求めるのは間違いだと思う。この世では,真理なる神以外のもの全てはひとつの不確かさである」(CWMG, vol. 39, p. 203)。なお,1年では帰国できないことがはっきりしたので,ガンディーは1903年に妻子をインドから呼び寄せている。

(21) 上掲註[7]参照。

(22) ここで私は「蹴り出した」と表現したが,英訳版『自伝』には「突き出してやろうと」となっている(ちなみに,オリジナルのグジャラーティ版にはこの句自体がない)。1992年末,ゴアの著名なガンディーアン・R.ケーレーカル氏にお会いした際,ガンディーの言葉が必ずしも史実に客観的ではない一例として興味深い話をして下さった。後年カストゥルバーイ夫人がある人に語ったのだそうだが,このとき夫であるガンディーは妻を「突き出そうとした」のではなく

「蹴り出した」のだという。決して誉められた話ではないが，若きガンディーの人間くささを感じさせるエピソードとして，ケーレーカル氏の思い出とともに，私はむしろほのぼのとした気分を味わいつつ，このことを想い起こす。

(23) CWMG, vol. 39, p. 221.

(24) CWMG, vol. 39, p. 222.

(25) 『自伝』，Part II, Chapter I "Raychandhai," CWMG, vol. 39, pp. 74-76.「3人の同時代人が私の人生に強い印象を残し，私を魅惑した。ラーイチャンダバーイは生きた接触によって，トルストイは『神の御国は汝の内にあり』によって，そしてラスキンは『この最後の者にも』によって」(CWMG, vol. 39, p. 76)。

(26) CWMG, vol. 39, pp. 165-166.

(27) CWMG, vol. 39, p. 166.

(28) 以上，会話の内容からガンディーの夫婦関係再考へと，あえて整合的に論を進めたが，実はそれは必ずしも『自伝』の記述から自明に導き出されるわけではない。前者から後者へと進められる回想の言葉は，唐突である。

(29) 「これ以上子どもをもうけることを避けたい」というのが，当初の夫婦関係の断念の意図であったが，これは「不十分」であり，1906年までに2度失敗したのも，そうした動機の不十分さに原因した，と分析される。『自伝』の記述を読むかぎり，夫婦関係の断念に関して，この6年間の彼の思考は支離滅裂だったようである。彼はそれを自分にとっての明確な義務と感ずる反面，夫が妻との関係を永遠の誓いでもって消し去るのは奇妙なことのようにも感じていた。

(30) 「反乱」と呼ばれはするが，実体は欧帝国主義の植民地獲得戦争の最悪の見本とされる戦争である。「いわゆる『反乱』は，ズールー族［南アフリカ東部のナタール地方周辺に住む原住民］の一人の首長が，新しく課せられた人頭税に反対して，部族民に不払いを煽動し，税金の徴収に来た警官を槍で襲ったことに対するナタール政府の報復的懲罰に端を発した。すなわち政府は，十二人の罪人を捕え，見せしめにと，近隣のズールー族やその他の首長を集め，その面前で，囚人を大砲の砲口の前に立たせて，砲弾もろともぶっとばすという残酷な処刑をおこなった。怒ったズールー族の酋長バンバタは，三百名の戦士を率いて抵抗し，善戦したが，武力の差はいかんともしがたく，七月には戦いは終結した」K.クリパラーニ『ガンディーの生涯(上)』(森本達雄訳，第三文明社，レグルス文庫153，1983年)139頁の訳注を抜粋。

(31) CWMG, vol. 39, p. 167.

(32) CWMG, vol. 39, p. 253.

(33) 大きな目的のためにより小さな目的を犠牲にするというこの考え方には，賛否両論が提出されてきたし，これからも提出されるだろう。そして，我々にとってはきっと，否定的意見を述べることの方が簡単であるだろう。しかし，ガンディーがその批判に真正面から答えようとしている言葉を私は知らない。彼が実際したような仕方で公的奉仕の方を優先させるのは，彼にとっては，何か自明のことと感ぜられているようなのである。

(34) このテーマについて語る言葉は実に多い。ここでは最もコンパクトな表現を引用した。典拠は順に，CWMG, vol. 39, p. 168(『自伝』の一節。1927年)；vol. 44, p. 70.(1930年)；vol. 88, p. 58.(1947年)。晩年になるほどに，彼の表現は単純明快なものになっていく。

(35) CWMG, vol. 44, p. 70.1930年の言葉。

(36) 本稿は，ブラフマチャリアの誓いに至るまでの期間を重点的に取り上げたため，それ以降のブラフマチャリアについては，ごく簡単にしか取り上げることができなかった。より詳しくは，上掲註*，拙稿「ガンディーの禁欲」，1章を参照。

(37) 私は「伝統」という言葉を進歩主義的な軸の上に配置させているのではない。この言葉で指示

しようとしているのは，現代的諸思考の地平面の上にもある位置を占めているような，古い歴史をもった一連の観念群である。とは言え，この言葉を用いることで，私は，ガンディーを単なる伝統主義者，はなはだしくは反動的復古主義者と断ずる立場を擁護してしまうかもしれない。しかし，もちろん私は，(古の智恵の価値を強く確信していたとはいえ)彼が“単なる”復古主義者ではなかったこと，少なくとも“全く悪しき”反動的思想家ではなかったことを了解している。彼は，そうした極的理解の間のどこか中間に，様々な要素を抱えながら位置しているのであって，しばしば見られる単調な理解はほとんど的を得ていない。しかし，彼が幼い頃から保持し・成長にしたがって声高に主張するようになっていった性倫理の内容については，それが“保守的な”ものであるとの強い印象は否定できない。

(38) 上掲註［3］参照。

(39) ガンディーが，宗教思想・政治思想・社会思想・法思想などを次々と吸収し，後の“マハトマ主義”へと至る道程を歩み始めるのが，このロンドン時代のことである。この時期を回想する『自伝』の部分は，CWMG, vol. 39, pp. 40-73。彼はロンドンで日記をしたためていたというが，残念ながら失われてしまっている。

(40) ここには，南アジアの多様な諸伝統のうちのある種のもの，あるいはまた，キリスト教文化圏の根強い伝統からガンディーが学んだものなどが含まれている。両者はしばしば内容的にほとんど重なってしまうことすらあった。

(41) 本来ならここで私はさらに，次のような問いにも答えるべきであろう。＜それでは何故，ガンディーは，この種の“保守的”性倫理を神の命令と確信することができたのか？＞残念ながらまだ私は，この問いに対して実証的に答え得る材料を示すことができない。彼の時代，もちろんもうすでに「性の解放」はひとつの思考として十分な力を得ていたわけで，史料の中にそうした論者に対するガンディーの主張の言葉が含まれている可能性はある。しかし，現段階では論拠として用いることができるような言葉にはほとんど行き当たっておらず，これからも目立った量を見いだすことは期待できないだろう。私は，たとえば次のような言葉を読むとき，ガンディーは，同様の無条件的・超論理的理解をもって，あえて「性の解放」論者との議論を行おうとしなかったのではなかろうか，と想像するのである。「…理性は神を知るのに無力である。神は理性の理解を超えている。「改行」しかし，この点を詳しく論じる必要はない。この問題においては信仰がきわめて重要である。私の論理は，無数の仮定を作り出すことができるし，破壊することもできる。無神論者は議論で私を打ち負かすかもしれない。しかし，私の信仰は私の理性よりもはるかに迅速に働くから，私は全世界に挑むことができる。…そのような神について，無知なる人がその存在を疑うなら，そうさせておけばよい。神を信じて，神に従うこと，神の栄光を賛美することに決して飽きることのない賢明な何百万もの人々がいる。私はその中の一人である」(マハトマ・ガンディー『私にとっての宗教』B.クマラッパ編，竹内啓二ら訳，新評論，1991年，72〜73頁)。

The Necessity of Brahmacharya in Gandhi's Ascetism

Mitsuhiro KONDO

M. K. Gandhi, well-known as the "Mahatma" who led the non-violent movement against British imperial rule, was a strict ascetic as well as a political leader. He attempted to pursue a life of simplicity and poverty and struggled to maintain perfect control by the will over his passion and desire. He took lust as his most serious challenge and, at the age of 37, ceased intercourse with his wife and took the vow of Brahmacharya.

But why did Gandhi need to take such a vow? Where was its necessity? Through a close reading of his autobiography, we can ascertain the following answers. First, he possessed a complex of lust and despotism toward his wife. Second, according to his own words, he had no other choice than to give up his household duties before making the decision to devote himself thoroughly to either public service or human nature. Last and most important, he held an unshakable belief in conservative sexual morality. This supported all of his feelings and efforts in relation to Brahmacharya and sustained and energized his asceticism for decades.